

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月20日現在

機関番号：11301
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22580232
 研究課題名（和文） ナラティブアプローチによるパス依存型ネットワーク経営の世代間継続要件に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of Intergenerational Continuation Requirements in Path Dependent type of Network Business Based on the Narrative Approach
 研究代表者
 長谷部 正（HASEBE TADASHI）
 東北大学・農学研究科・教授
 研究者番号：10125635

研究成果の概要（和文）：

本研究はナラティブアプローチの問題点の検討に基づき「語る」行為に着目した新たな実証の方法を提案した。また、ネットワーク型組織の経営継承においては、「物語り」の共有に着目した分析枠組みを設定し、その共有に至る過程において「物語り」への「自覚」や「共感」を組み入れた実証的な視点が重要であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study tried to propose a new demonstrational method focused on narrative act based on the consideration of issues concerning narrative approach. And more found is that in case of path dependent type of network business, it is important to point the shared narrative of process to demonstrational point of view sympathy and conscious awareness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：農業経済学

科研費の分科・細目：農業経済学

キーワード：物語り，実証，ナラティブアプローチ，ネットワーク，経営継承，フランチャイズ，共感，授業実験

1. 研究開始当初の背景

物語り（ナラティブ）は、人々が互いに語り継ぐことにより皆で共有するものとなるので、人々が所属する組織や社会の同一性（アイデンティティ）の基盤となり歴史となると同時に人々の行動を規定する規範としての機能を持つ。このため物語りは、さまざまな分野において理論と実践の両面において活用されている。物語りは、人々が「語る」ものであるため、経済的な統計量や自然科学

の実験結果の場合と異なりデータ処理をもとにいわゆる「客観的な」分析を行うことが容易ではない。そこで、本研究では、物語りの実証という面に焦点を当てて、その解明に取り組んだ。

2. 研究の目的

市場対応が重要な畜産業において相対的に規模の小さい農業経営が環境変化に適応するための一方策として、本研究で着目するネットワーク形成がある。ネットワーク型の

農業経営に関する従来の研究は、機能と技術面、組織管理に注目している。

しかしながら、畜産経営の外部環境に関する研究が進展している一方で、ネットワーク型畜産経営の内部環境に関わる組織の経営継承問題を取り上げた研究は、管見の限り見当たらない。また、経営継承に関わる農業経済学分野の研究の進展は、個人から個人への経営継承に焦点が当てられており、組織全体での経営継承問題を取り上げている本研究とは、視点が全く異なる。一方、上下関係や組織への忠誠心が重要視されていた時代を過ぎた団塊の世代が定年を迎え、日本的経営の特徴であった年功序列、終身雇用制度の実質的な崩壊で円滑な技能継承が困難になっている。

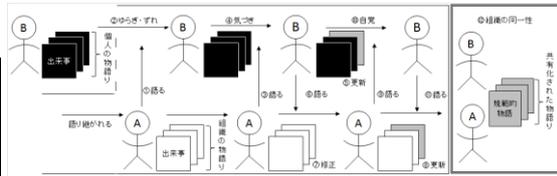
さらに団塊の世代と成長をともした日本経済を牽引した企業の内部環境問題に対して、一般経営学ナレッジマネジメント分野では「物語り」による解決方法が注目を集めている。ネットワーク型経営を永く持続させるためには、ネットワーク全体の円滑な組織の経営継承こそが解決すべき重要な課題である。

本研究の目的は、既述の問題解決をメンバーの体験（知識・記憶・出来事）をストックして、「物語り（ナラティブ）」を共有し知識創発につなげ、実需の掘り起こしによって問題解決を図っているパス（発展経路）依存型のネットワーク経営で先進的な取組みを展開している畜産経営を事例に、次世代へ繋ぐ経営の世代間継続条件を経営継承面から解明することである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、経営実験的な手法である参与観察、聞き取り調査、文書記録、アンケート、統計データに加えて、一般経営学のナレッジマネジメント分野で注目を集めている「物語り（ナラティブ）」の視点に重点を置いている。本研究では、「物語り」を narrative、「物語」を story に対応させている。人と人が語り合い（「語りー聞く」の相互作用）を通じて共通の「物語り」を創り上げることを基本に据えている。「物語り」の定義がこのようなものであるとすると、人々の行為によって発生するさまざまな出来事の積み重ねにそのものが物語りとなる。農業者の日々の互いの活動の結果（さまざまな出来事）もまた、物語りを生む。「物語り」の基本的な特徴は、野家啓一が提唱する複数の出来事を時間軸上に並べてその順序関係を示すことに依拠している。それを踏まえ、本研究では「自覚に至るプロセス」に着目している。

図1 物語り論と自覚に至るプロセスを統合



た分析枠組み

(2) 本研究の学術的な特色は、組織の発展経路（パス）物語りを知識の伝承方法として捉えて、その物語りが世代間でどのように語り継がれているかを組織の経営継承という側面から探ることである。特に、「物語り」に基づく聞き取り調査データの解析は、PCの処理能力向上に伴いテキストマイニング手法の開発が飛躍的に進み、膨大なデータ解析が可能になった。つまり、アンケート調査結果や統計データなどの客観的データだけではなく、個人の主観的データを定性的・定量的に連続した時間軸上に整序して、総合的に実践的な経営の世代間継続条件を把握する試みは、当該分野において全く行われず、独創性が高く刺激的な研究課題である。本研究において、特に前半部分では基本的に「語られた内容を書き起こした文書」を対象とした分析という意味でのナラティブアプローチを採用するが、後半では「語る」行為に着目し、実証的分析につなげようとする実験を試みる。

(3) 本研究で対象としたのは、次の3つである。まず、パス依存型ネットワーク経営の先進事例として知られ、所属農場の相互交流を基本とする①(株)グローバルピッグファーム（以下、GPF）ならびに設立メンバーである(株)ヒルズ（宮城県大河原）である。GPFの性格を鮮明にするため、フランチャイズ型として対照的な②山形県酒田市を拠点に養豚一貫経営を確立し全国的に垂直的事業提携を展開しネットワークを形成している(株)平田牧場も取り上げる。さらに、「語る」行為の効果（物語りが生み出す「共感」）を確認するため③東北大学学部学生を対象とする授業実験を採用した。

4. 研究成果

(1) 本研究では、「語られた内容を書き起こした文書」を対象とした分析という意味でナラティブアプローチを採用した。まず、アンケート調査の自由回答にテキストマイニングの手法を適用して①GPFというネットワーク型経営についての物語り（GPF物語り）の共有による規範化（歴史化）に関して創業者・後継者の両世代について明らかにした。また、この結果に個別の聞き取り調査を加え②個別経営の後継者という限定付きであるが、このGPF物語りに関し「自覚に至るプロセス」を確認した。さらに、③所属農家からすればフランチャイズ型経営であ

る平田牧場の場合の創業者と後継者の経営方針の違いについて分析した。

(2) ナラティブアプローチの問題点の検討に基づき④「語る」行為に着目した新たな実証の方法を提案した。そのうえで、⑤「語り」が登場人物（あるいはそのモデルである人物）への「共感」を生み出すことを実証的に明らかにする実験を試みてその有効性を確認できた。特に、本研究で重要な課題として位置づけていたネットワーク全体の円滑な組織の経営継承においては、「物語り」の共有に着目した分析枠組みを設定したが、その共有に至る過程において「物語り」への「自覚」や「共感」を組み入れた実証的な視点が重要であることを明らかにした。本研究成果は、農業分野の組織継承問題に関わる学術的な深化への寄与が期待できる。

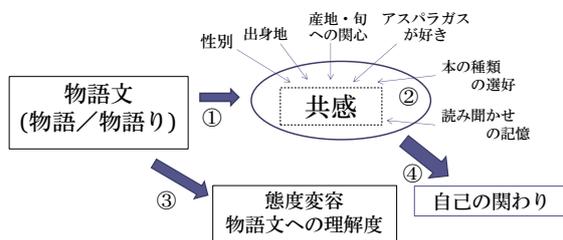


図2 物語りによる「共感」発生モデル

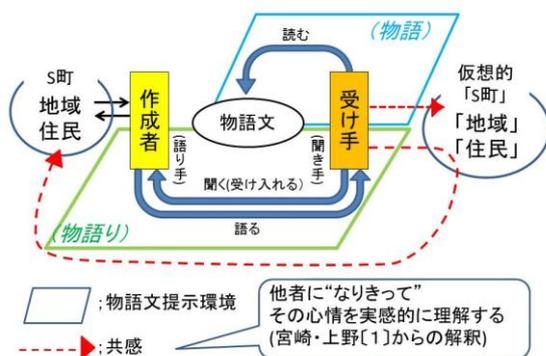


図3 物語りによる「共感」発生の実証枠組み

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 小山田晋, 語りの力の実証法 -それは「ただの言葉」なのだろうか-, 農業経済研究報告, 査読無, 第44号, 2013年, 掲載確定 (頁数19ページ, 最初と最後の頁は未定)
- ② 小山田晋, 長谷部正, 木谷忍, 安江紘幸, 伊藤まき子, 東日本大震災被災地復興に対するよそ者のかかわり方に関する倫

理学的研究, 農業経済研究報告, 査読有, 43, 2012, pp.15-36.

- ③ 安江紘幸, 平口嘉典, 長谷部正, 蠱惑的女性をシンボルとした新たな農業・農村像追求の可能性, 農村経済研究, 査読無, 30(2), 2012, pp.46-51.
- ④ 長谷部正, 安江紘幸, 平口嘉典, 同世代の感想を通してみたノギヤル活動の風景論的評価, 農業経営研究, 査読有, 49(1), 2011, pp.134-141.
- ⑤ 長谷部正, 安江紘幸, 木谷忍, 農学分野における学士課程教育の役割-「非まじめ」授業実験を基に-, 2011年度日本農業経済学会論文集, 査読有, 2011, pp.79-86.
- ⑥ 木谷忍, 長谷部正, 飯塚聖司, 持続可能な地域づくりのための伝統文化活動の機能について-社会関係資本の土台としての文化資本の観点から-, 地域学研究, 査読有, 41(3), 2011, pp.731-744.
<http://dx.doi.org/10.2457/srs.41.731>
- ⑦ 安江紘幸, 長谷部正, 伊藤房雄, ネットワーク型農業経営組織の経営継承に関する一考察-グローバルピッグファーム(株)ニューリーダーの会を事例にして-, 2010年度日本農業経済学会論文集, 査読有, 2010, pp.134-141.
- ⑧ 長谷部正, 安江紘幸, 伊藤房雄, パス依存型養豚経営の安定性に関する研究-ネットワーク型経営であるGPFを事例として-, 農業経済研究報告, 査読無, 2010, 42, pp.15-25.
- ⑨ 小山田晋, 地域環境の評価をめぐる対立と共感に関する研究-地域で共有された環境観に配慮する能力としての共感-, 日本環境共生学会 2010年度学術大会発表論文集, 査読無, pp.128-133.

[学会発表] (計5件)

- ① 長谷部正, 安江紘幸, 木谷忍, 森繁哉, 村松真, 農学分野教育における身体性の役割-「非まじめ」講義実験 その2-, 日本農業経済学会, 2012年3月30日, 九州大学.
- ② 長谷部正, 『資本論』を経済理論として読むことの狭隘さに関して-価値形態論をめぐる-, 日本農業経営学会, 2011年9月11日, 三重大学
- ③ 小山田晋, 地域環境の評価をめぐる対立と共感に関する研究-地域で共有された環境観に配慮する能力としての共感-, 日本環境共生学会, 2010年9月26日, 名古屋大学
- ④ 長谷部正, 安江紘幸, 木谷忍, 森繁哉, 村松真, 「農山村を踊る」授業に対する学生の感性的反応-身体言語行為による「非まじめ」授業実験-, 日本感性工学会, 2010年9月5日, 東京都

- ⑤ 長谷部正, 安江紘幸, ナラティブ・アプローチによる実証分析に関する一考察, 東北農業経済学会, 2010年8月28日, 山形大学鶴岡キャンパス

[図書] (計1件)

- ① 長谷部正「風景〈物語り〉」桑子敏雄, 千代章一郎編『感性のフィールド ―ユーザーサイエンスを超えて』東信堂, 2012, pp. 23-40.

[その他]

ホームページ等

<http://www.agri.tohoku.ac.jp/agriecon/japanese/kankyo/index-j.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷部 正 (HASEBE TADASHI)
東北大学・農学研究科・教授
研究者番号: 10125635

(2) 研究分担者

小沢 互 (OZAWA WATARU)
山形大学・農学部・教授
研究者番号: 70211141

(3) 連携研究者

伊藤 房雄 (ITO FUSAO)
東北大学・農学研究科・教授
研究者番号: 30221774

安江 紘幸 (YASUE HIROYUKI)
東北大学・農学研究科・助教
研究者番号: 40508248

小山田 晋 (OYAMADA SHIN)
東北大学・農学研究科・教育研究支援者
研究者番号: 90593137